

自著と
その周辺

IgG4 関連疾患アトラス —IgG4 研究会モノグラフ—

編集 川 茂幸, 川野充弘

前田書店 199頁
2012年3月刊行
定価 5,700円+税

IgG4研究会より「IgG4関連疾患への誘い」を2010年に刊行して2年経過しましたが、今回、IgG4関連疾患の画像所見や病理所見を中心にまとめた「IgG4関連疾患アトラス」を上梓しました。

IgG4関連疾患とは、①血清 IgG4の上昇、②病変局所に IgG4陽性形質細胞の著明な浸潤、③ステロイド治療に対する良好な反応性、④ほぼ全身諸臓器に病変が分布、によって特徴づけられる疾患です。新しい疾患概念で、その詳細、全体像については未だ明らかになっていません。しかし、本疾患概念成立の背景には、自己免疫性膵炎で血清 IgG4が上昇し、膵病変局所に IgG4陽性形質細胞の著明な浸潤が存在するという、2001年、2002年に信州大学から発信された研究論文が大きく貢献しています。自己免疫性膵炎には下垂体炎、涙腺・唾液腺炎、甲状腺炎、間質性肺炎、硬化性胆管炎、尿細管間質性腎炎、後腹膜線維症、大動脈炎、前立腺炎など全身諸臓器の病変を合併します。これら膵外病変は膵病変と同様の病理変化である IgG4陽性形質細胞の著明な浸潤を呈し、共通の病態が背景に存在することが推定され、全身性疾患が提唱されました。ただ、画像所見、病理所見についてまとめたモノグラフがありませんでしたので、本書は本疾患を検討する上で、有用な情報を提供できると考えています。

IgG4関連疾患の研究は前述したごとく、2001年に信州大学から発信された論文から始まりました。以後、信州大学から多くの論文が世界に向けて発信されてきました。ただ、ここ4～5年間は日本や海外の他の施設の研究体制が充実してきて、逆に信州大学でのこの分野の研究活動は衰退傾向にあるのが実情です。昨年10月に、ボストンで IgG4関連疾患に関する第1回国際シンポジウムが開催されました。主催された Harvard 大学の Stone 先生が今年の New Engl J Med の2月9日号に「IgG4-related disease」の総説を掲載され、本疾患が世界的に認知されたと考えられます。このこと自身は喜ばしいことかもしれませんが、一方では本邦で提唱された疾患概念も、結局のところ米国 (Harvard 大学, MGH) 主導で世界に発信されていくのだと、これまで本疾患研究に関与してきた本邦の研究者も残念に感じていると思われる。それでも IgG4関連疾患について地道な検討を続けてきた本邦の研究者の間で、病態の詳細をモノグラフにまとめようという機運が高まってきました。多くの本邦研究者は自分たちが長年関わってきた IgG4関連疾患に関する手作りの成果を、泥臭くとも形に残したいという素朴な臨床家の願いをもって、本モノグラフ作成に関わってきました。

IgG4関連疾患は関連する分野が多岐にわたり、臨床医が IgG4関連疾患に関する情報を効率よく集めることは困難です。この「IgG4関連疾患アトラス」は画像、組織の新知見について、専門のジャーナルに発表された最新の内容が、わかりやすく紹介されています。私は消化器内科医ですが、同じ内科のリウマチ関連、腎臓関連のジャーナルにさえ普段目を通すことは少なく、今回のモノグラフは知識の整理に大いに役立ちました。普段なかなか接することがない、リンパ節病変、皮膚病変についても触れられていて助かりました。前に刊行した「IgG4関連疾患への誘い」ともども参考にしていただければと思います。「IgG4関連疾患アトラス」については英語版を出版する予定であり、世界に向けて発信していく予定です。

信州大学においても今後は若い先生を中心に、IgG4関連疾患研究が進むことを期待したいと思います。少なくとも若い先生かたが臨床研究を楽しく進めることができる環境を提供していただければ、医学部・大学としてのサポート体制をお願いしたいと思います。IgG4関連疾患という新しい疾患概念の臨床研究に関われることは千才一隅のチャンスと考えられますが、このまま衰退していくことがないように願うところです。

(信州大学総合健康安全センター 川 茂幸)